

---

そうだ。バトスピで食べよう。

ダ・カーね。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

そうだ。バトスピで食べよう。

### 【Nコード】

N6561Y

### 【作者名】

ダ・カーね。

### 【あらすじ】

異界の存在発見と同時に、地球へ伝来したバトルスピリッツ。

これによりバトルスピリッツ、プロハイランカーリーグが発足してから30年。

以前から高級ブランドで名を馳せ、今ではバトルフォームファッションやカードスリーブの特許権すら持つ“レイ・ロレンツォ”社。

その抱えのプロハイランカー“松風アリサ”。

これは松風アリサのカードバトルー人生を描いた物語である。

この作品は“バトルスピリッツ二次創作”です。

不定期更新に加え、駄文になりますが、よろしくお願いします。

では申し訳程度に、「ゲートオープン！界放オオツ！」

## ブローグ私塾、松風BS塾

全窓の側面から、光が射し込む教室がある。

二人も座れば、埋まってしまうような長卓が二列、四つずつならべられた教室だ。

今にもビルの谷間に飲まれ、夜闇を呼び込むだろう陽光を浴びる教室には、幾つかの人影。

四人の若い男性が屯し、ガヤガヤ騒いでいるかと思えば、その後ろの席では老夫婦が小さな声で話をしていたり、最後列にはブレザーの制服を凜と着こなす女子高生の姿が見受けられる、実に奇妙な教室だ。

やがて、陽光が墜ち、自動で電灯の白い明かりが教室を照らす頃、

「やあ、皆揃ってるか？」

全窓とは逆の位置に設置された引戸を明け、新たに銀色が射し込んだ。

“塾”教師、松風アリサ。

アリサは腰まで伸びた銀髪を振り、七人の姿を確認すると両手を“高く”伸ばして、紙袋を教卓の上に置いた。

ふう、と一息、

「全員揃ってるな。なら、始めるとしよう。―さて、先週に出していた宿題だが―」

言いながら流し目で四人の男性を睨みつけるアリサの眼力に、

「―げっ」

口を揃える四人に呆れたアリサが、

「お前達に出したような宿題だというのに…。里村夫婦と櫻井を見る！毎週きつちりと出しているというのに、お前達は―」

「まあまあ…、先生。わしら老いたモンは、時間があるがよって、宿題ができとりますが…、若者は多忙であります故、何卒…」

四人に怒鳴るアリサを、まるで孫をあやすように諫めようと里村夫が声を出すと、里村妻が「ですじゃ…」と頷く。

「む…、あなた方にそう言われると、辛い…」

すると、小さな頬を膨らませ、ふて腐れるように俯いたアリサを見て、

「ロリサテラエロス！」

四人組の一人、眼鏡をかけた、肥満体型の藤山が立ち上がるなり嘔血。

白化して朽ち果てると、仲間叩かれて意識を取り戻す。

「藤山よ。お前はエロゲのエロシーンに突入するまでに、パンチラで果てるような男だったのか？ 違うだろ！？」俺達のヘブンスゲートは、まだ開かれちゃすらいねーんだぜ？」

「——っ！？ ありがとう久慈——俺、頑張れるよ！」

「相変わらず、お前達の話はわからん」

アリサが顔をあげる。

すると、目に入っただのは、嫌悪感を隠そうともしない表情の櫻井だ。

以前、藤山の後ろに座る三屋に「黒髪ロング萌え」と呟かれて以来、髪をポニーテールに縛り上げ、最後列を陣取っている彼女に、アリサは手招きをする。

「櫻井、前に来たらどうだ？」

「結構です」

アリサの誘いを断った櫻井は、ツイとそっぽを向いてしまう。

…まー、出席してるだけマシか。成績も悪くないからな。

紙袋を横に倒して取り出した出欠表に、アリサはチェックをつけていく。

「さて、お前達のため（ひいては、読者に世界観を把握してもらうため）に、今日は世界の現状を説明してもらおうか。―藤山」

「ほいさ」

待ってましたと、贅肉を揺らし藤山が立つ。

入塾の際に購入した教材のページを開き、一息。

あー、あー、と喉の調子を確認した後、口腔を広げた。

「バトルスピリッツ―それはカードとコアを駆使し―」

「ああ、その項は構わん。2099年から年代を追ってくれば良

い」

藤山の発するテノールボイスを押し退け、アリサのソプラノが指示する。

沈黙。

「……言い声でも、ダメっすか？」

「ああ」

即答。

残念そうに酸っぱい顔を作った藤山が、洪々年表を読み上げる。

2099年

異界の存在が発覚。

と同時に、異界の秩序とも言える“バトルスピリッツ”が地球に伝来。

「そうだな。2060年頃に騒がれていた、時間移動の正体が実は、異界へのゲートを開く、ということになっていたな。未だタイムマシンは完成してないわけだが……」

苦笑、咳払いの動作の流れを済ませると、藤山に続きを促す。

同年

娯楽としてのバトルスピリッツが普及する。  
それに伴い、異界人との交流も盛んになる。

「質問ですじゃ」

「どうぞ」

拳手したのは里村夫だ。

「異界人との交流が盛んになる、と言つとりますが先生…。わしらの生活は、余り変わつとらんのじゃが…」

「異文化に触れ、取り入れることによる生活の変化が感じられない、ということか。いい質問だ。―答えはこうだ。“異界独特の文化は、地球の文化のいずれかに該当する。”」

一同がどよめく。

「異界の文化には、明らかに我々人間の手が加えられていたんだ。調査隊の調べで、“異界王”というキーワードが浮かび上がった。今は故人らしいが、異界の文明を築き上げたのは、間違いなく異界

王だろうな。―意図的にか偶然かは別として、異界王が地球から異界へ渡った人間だというのは、間違いないだろう。即ち、異界の文化は地球ベースに組み上げられた物といえる。異界の特産といえばバトルスピリッツくらいなものだろうな」

おおお、歓声をあげる一同に赤面が悟られぬよう、授業の準備を進めるフリをして、アリサは教卓に隠れる。

「ふ、藤山。続ける」

「おい―っす」

2103年

地球側でもバトルフィールドの構築が可能に。

これによりバトルスピリッツは、娯楽とスポーツの二面性を持つようになる。

「これは皆も知っての通りだな。特にプロハイランカーの登場により、バトルスピリッツはスポーツとしての面がより強くなっただろうな。野球チームが企業と契約しているように、プロハイランカーにも企業と契約し、それを生業とする者もいる。―当然、これはバトルフィールドの登場により“やるバトスピ”だけでなく“見るバトスピ”というジャンルが生まれたからだが―」

―通り語り終えたアリサが、顎で藤山に次を促す。

それよりも早く、久慈の一つ後ろに座る赤沢の、

「先生、他人事じゃないっすよね。今年度プロリーグ暫定4位、トップクラスハイランカーの一人、松風アリサなんっすから」

という言葉にアリサは、少し面食らった顔をする。

塾の講師としては適切な物言いだと判断したのだったが、なるほど、次回からは話せる範囲で“私”を絡めてゆこう。

決意したアリサが頷いていると、ふと先の言葉に引っ掛かる。

「ちょっと待て。暫定4位、と言ったのか？」

おかしい、昨晚の連絡ではまだ暫定3位に残っていたはずだ。

慌てて記憶を掘り出すアリサに、赤沢の隣の三屋が、

「一昨日の時点で4位だったアンドルー選手が、昨日の内に10勝あげたようですね。元々、先生とアンドルー選手は僅差で競いあっていたわけですし、一桁台の差で順位変動が起こっても、不思議じゃないですよ」

「今朝の更新で変わってたのか！？くそ！余裕持って弁当など作る

からこうなる！」

悶え叫ぶアリサに、ああ、と顔を上げた藤山が付け足す。

「先生、アンドルーみたいにプロ稼業に専念してるわけじゃないっすからねえ。むしろ塾講師や内職しながら、対等に渡り合えてるのが凄いくらい」

「む…、そうか」

少し得意気な笑みを見せたアリサは、氣をとり直したのか、

「話が逸れたな。――2103年からだったか…。藤山、続けてくれ」

「あいさ」

同年

バトルスピリッツ、プロハイランカーリーグ発足。

「先生、年いくつつすか？」

「なっ！？」

と藤山の言葉に反応したのは最後列の櫻井だ。

元来、女性の年齢やBWHを尋ねるのは失礼にあたり、それは現代でも変わらない。

櫻井の怒気を孕んだ視線に気付かず、失礼な藤山は続ける。

「今2136年じゃないっすかあ。先生もう雰囲気か“最古参”みたいな感じだから…。—どう見ても小学生、鼻屑目でも中学生なのに」

最後のは小声でボソリと。

身長178cmの藤山に対し、153cmのアリサ。

アリサの童顔と柔らかそうな銀髪も相まってか、小学生がよくて中学生にしか見えない。

「28だが」

一同から、懐疑の視線が向けられるが、気にせず、

「2124年にプロリーグに入ったんだ。中学校での成績がすごい悪くてな。親にも勘当され、行く宛がなかった私を、今の“レイ・ロレンツォ”の社長がスカウトしてくれたんだ」

一息吐いて、

「『生きたいなら自分で稼げ、私はその道しるべを立ててやる』とな」

「さすが、高級ブランドの社長…。一般人に吐ける台詞じゃないっすね」

「社長には感謝している。おかげさまで、生活苦もないしな。―と、また話が逸れたか。…まあ復習はこのくらいでいいだろう」

教卓の上の紙袋を下ろし、最前列の長卓に置く。

「授業だ」

里村夫婦がヨタヨタと立ち上がり、よっこらせ、と長卓を押す。

教卓から見て左最前列の長卓には椅子を設置していない。

なので、こうして二列目を押すと、合わさり、“充分な空間”が確保される。

アリサが紙袋に手をつ込み、何かを取り出すと、藤山が、

「しかし、お勉強会に来てるはずなのに、娯楽とはこれ如何に」

「面白いだろう？ “こういうこと”を教える塾があってもいいじゃないか」

一同からイエスの返答。

詰め込み型より参加型の授業が求められる時代だ。

昨今の流れにそぐわず、彼らも座学より実践、百聞は一見にしかず、アリサの行動に目を輝かせる。

それを見て、アリサの口元もニヤリと笑う。

「では始めようか。ーバトルスピリッツッ！」

## プロローグ〈私塾、松風BS塾〉（後書き）

〈反省会〉

アリサ「…………おい」

はい、何でござんしょ。

アリサ「バトルがないが、大丈夫か？」

大丈夫じゃない、大問題だ。

アリサ「不定期かつ【鈍足】更新だというのに、1話1バトルにしないでどうする？」

世界観とか紹介したかったんですー！バトル書いてもよかったけど、プロローグって短いもんじゃない！？

アリサ「まあ…、そうだが…。―次回はちゃんとバトルするんだろっな？」

はい！書かせていただきます！誠心誠意書かせていただきます！

アリサ「ならいいんだが……。ちゃんと書けよ？『昨今のバトスピブームに乗ってみようと思うんだが、こいつをどう思う？』とまで言っていたんだからな」

任せんしゃい！駄文紡いじゃうよ！？」じゃあこのへんでキャラ名”紹介、言ってみよう！

アリサ「名だけか」

主人公：

松風アリサ（まつかぜ アリサ）

塾生：

藤山虎太郎  
ふじやま こたろう

久慈重治  
くじ じゅうじ

三屋充  
みや みつる

赤沢治郎  
あかさわ じろう

里村佐吉  
さとむら さきち

里村幸枝 さとむら さちえ

櫻井百花 さくらい ももか

プロハイランカー：  
アンドルー・セルゲノフ

アリサ「本当に名前だけとはな……」

魅力的でしょ？

アリサ「――…決める！合体アタック！」

ああ！？飛ばされた！？

## 白き城塞。〈凍獣マン・モール〉の壁。（前書き）

今回からバトルを始めます。

互いのターンエンド時に、状況確認のため、状況を記載してあります。

- が回復状態のスピリット
  - が疲労状態のスピリット
- を表すアイコンです。

## 白き城塞。〈凍獣マン・モール〉の壁。

簡素な小部屋がある。

お世辞にも綺麗とはいえないその部屋には、備え付けのロッカーと、真ん中にポツンと机とパイプ椅子が置かれている。

「まったく…、無茶苦茶だ！」

愚痴。

パイプ椅子には少女が座っていた。

腰まで伸びた長い銀髪と、幼い顔立ちが非常に愛らしい。

そんな愛らしい少女の表情は、危機迫る物に仕上がっている。

何十…いや、何百枚もの紙の束からあーでもない、こーでもないとカードを抜き差し。

齒軋りまで聞こえてくる。

『社長直々のご命令ですよ？断りようがありません』

少女の傍らに置かれた携帯の画面に写し出された男の顔が、苦笑し

ている。

「どうせ、社長に仲介してもらえば私が断らないと踏んだんだろう。製作部の考えそんなことだ」

が、その作戦は見事成功したと言えるだろう。

その手前、少女もこれ以上つく言うことができない。

それよりも、今は手と脳だけを動かせ。

そして、

「よし！できた！」

『さ、さすがですねアリサさん』

「いや、急場凌ぎの思い付き。その寄せ集めだ。思うように戦えないのが、現実になるだろうな。相手が“奴”で助かった」

アリサは、山のようなカードの束を眺めて安堵の息を吐く、が、眼前の今しがた完成したデッキに不服感を覚え、口をムツとさせた。

「井垣、試合開始まで後何分だ？」

『後5分。――ギリギリでしたね』

画面の奥でも、ため息が吐かれる。

アリサが手を高く上げ、伸びをする。

約20分の格闘。

アリサは疲労感を覚えていたが、

「本番はこれからだというのに……」

『衣装の方も、ちゃんとセットしましたか?』

井垣が問う。

「あ、ああ……」

物憂げなアリサの返答。

完成?されたデッキの隣には、もう一枚、黒く塗りつぶされ、金箔で“HIGH RANKER PASS”と捺されたプレートがあった。

「私は着せ替え人形か…」

その時、

「松風アリサ選手、準備はよろしいでしょうか？」

アリサの座る眼前に備え付けられた扉が、叩かれる。

すかさず、アリサは返答する。

「井垣、切るぞ。ーはい、大丈夫です！」

『客席で見えますよ』

井垣の台詞を最後まで聞くことなく、アリサは携帯の電源を落とす。

今更、声に出して言うようなことでもない。

デッキとプロハイランカーパスを手に、立ち上がったアリサは、係員の案内され、控え室を出た。

『セクシー！？』

『NO！ギャラクシー！！！！』

反響しやすい狭い廊下に、雄叫びが響き渡る。

音はビリビリとした余韻を残し、通り過ぎていった。

「ギャ…、ギャラクシーか…。相変わらずの人気だな」

呆れ半分、尊敬半分。

『セクシー！？』、そう叫んだ男は、こう言った場所には必ずと言っていい程現れる。

全世界、どこへでも現れるその神出鬼没さから、複数人いるとかいないとかの噂も流れている。

ネットでも時たま、笑い種として使用されるが、それもまた彼の人氣を助長しているのだらう。

「……末恐ろしいな」

バトルスピリッツが人氣を泊している以上、彼の人氣が途絶えるこ

とはないだろう。

一人の男の華々しい未来を見たアリサ、廊下の奥に目をやる。

円形の台、昇降機だろう。

…もう乗ってるとするか。

昇降機に足を伸ばすと、頭上からギャラクシーの語りが終えたのがわかった。

時間だろう。

昇降機がくぐもった音を発しながら、アリサの小さな身体を会場へと運んだ。

アリサの目に斜光が飛び込み、思わず目を閉じてしまう。

…スポットライトはやめてほしいな。

うつすら目を開けると、ピエロに似た奇抜な格好をした男が、マイクに、いや、大勢の観客に向け、

『2136年暫定4位、レイ・ロレンツォお抱えの最強女バトラー！松風アリサの入場だぁー！さっそく今日の意気込みを聞いてみよう！松風選手！』

ギャラクシーが、腰を曲げてマイクをこちらに向けてきた。

身長が低いのはわかっているが、何も腰を90度曲げるのは失礼だろ、と内心不機嫌になりつつも、ギャラクシーのマイクを借りる。

「勝ちます」

.....。

一言、沈黙が流れる。

すると、真っ先に我に帰ったギャラクシーが、

『ええ〜つと、それだけ?』

「バトル内で、レイ・ロレンツォ社の新商品の説明がある（かも知れない）ので、ご注目ください。…何か?」

『あ、いやいや。ないならいいんです。ないなら…』

…やはり塾生と話すのとは勝手が違うな。言葉が出ない。

一人意気消沈した観客とギャラクシーを他所に、アリサは一人反省会。

気を取り直し、ギャラクシーがマイクを握り直す。

『た、対するは暫定5位！“キャッスルウイザード城壁魔術師”の異名を持つ男！ガンロック岩肌アアッ！！』

「来たか…」

アリサとギャラクシー、会場が注目する昇降機は、昇ってくると言うより、盛り上がると言った方が正しいだろう。

それ程の巨体が、昇降機に乗っているのだから。

…確か、リングネームだったか。

名は体を表す、ゴツゴツとした巨体はガンロックの名の通り、岩肌と言つべき物。

28になった今も幼児体形のアリサは、対になる。

『では、ガンロック選手にも意気込みか何かを―』

「全力で挑むまでだ…」

一言。

ギャラクシーから向けられたマイクを突き返すと、ガンロックはアリサを睨む。

対するアリサも、口元を歪ませ、笑みを返した。

すると、黙りかねたギャラクシーが、言う。

『クール対寡黙って…、今一盛り上がりが…。——んまあ取り敢えず、このままにらめっこしててもしょうがないし…』

二人の間を陣取って、ギャラクシーが天を仰ぐ。

『バトルフィールド、いくぜえええ——ゲートオープン！』

界放オオオオツ！！！！

会場が一丸となって紡いだ合言葉は、全ての視界を奪った。

紅に輝く空。

円形のバトルフィールドを吹き抜ける乾いた風が、遠間に対峙する二人の間を駆け抜ける。

荒れ地のようなバトルフィールドの両端は台座になっており、それぞれの眼前には、腰の高さで調節された台があった。

このバトルフィールドを取り囲む、中世ヨーロッパを思わせる観客席ぎっしりの客を見渡してから、アリサは対岸のガンロックに目を向ける。

さつきまで作業衣を纏っていたガンロックの服が無骨な、金色の鎧兜に変わっており、胸元には5つの光がV字に輝いている。

「…お買い上げ、ありがとうございます」

ポツリと、アリサが呟いた。

レイ・ロレンツォの社訓である。

そして、アリサの衣装も変化していた。

紫を基調としたパーティードレスに、背面には悪魔の羽と尻尾。

…商品名“ヴァンパイアドレス”か…。これは恥ずかしいな。

突然、

「お前との再戦を、待ちわびていた」

ガンロックが、口を開く。

そこには、会場では感じられなかった饒舌さが感じられた。

対しアリサも、

「ああ、私もだ、城壁魔術師。――最高のデッキで相手できないのが、残念なくらいだ」

「……仕事か。なら仕方あるまい」

納得したような表情を見せるが、ガンロックは納得していないだろう。

四枚のカードを握る手が、震えていた。

【ターン1】

「先攻はもらう。――スタートステップ！」

ガンロックの先攻。

スタートステップの掛け声に合わせ、ガンロックの台が淡く光を放つ。

バトルフィールドが、ガンロックの先攻を認めたのだ。

「ドローステップ！……ふっ」

「…いいのが引けたか」

笑う大男の手に舞い込んだカードに、アリサが一抹の不安を感じていると、

「メインステップ―ネクサス《超時空重力炉》を配置する！」

ガンロックの手から放たれたカードが、フィールドに、ガンロックの背後に、巨大な建造物が現れる。

ただの建造物であるはずの《超時空重力炉》は、帯電し、奇妙なプレッシャーを放っている。

アリサが冷や汗をかく。

「《超時空重力炉》、LV1でコスト3以下のスピリットを、軽減し召喚できなくするネクサスカ…。厄介だ」

「ターンエンド」

ガンロックのエンド宣言。

それに合わせ、ガンロックの台が光を失う。

ガンロック

□《超時空重力炉》0、LV1

ライフ5

手札4

リザーブ1

トラッシュ3

アリサ

空

ライフ5

手札4

リザーブ4

トラッシュ0

【ターン2】

「なら私だな。——スタートステップ!」

今度輝いたのはアリサのフィールドだ。

ガンロックの言えなかった言葉を紡ぎ出す。

「コアステップ!」

声に呼応して生まれたのは、コアと呼ばれるバトルスピリッツのキーパーツ。

全てを生み出す源が、アリサのライフの下に一つだけ現れる。

「ドローステップ、メインステップ！」

仕方がない、と五枚ある手札の内の二枚をフィールドを出す。

「来たれ！《ソーダール》を二体召喚、LV1だ！」

《ソーダール》×2

1、LV1、BP1000

紫色の宝石が二つ、虚空に現れたかと思うと、次の瞬間には破裂。

空間から姿を消したそれは、新たな生命の産声を創造する力となる。

皮もなく肉もない、純白の骨を全てとしたスピリット《ソーダール》。

それが二体、アリサの前に現れた。

「今日は紫か」

「そうだ。悪いが、速攻をかけさせてもらう！」

…とはいえ、軽減ができなかったのは痛いな。後に響かなければ良いんだが。

歯噛みはすれど、これ以上は悔やまない。

「アタックステップー！《ソードル》でアタック！穿て！」

建造物であるネクサスと、生物であるスピリットの違いは、それ単体で動けるかどうかにある。

アリサが《ソードル》のカードを横に倒す。

それを皮切りに、《ソードル》の一体が動き出した。

ガンロック目掛けて、駆け、飛びかかる。

「ライフで受ける」

ガンロックの前に薄いバリアが張られ、《ソードル》の右腕を降り下ろした攻撃は、ガンロックには届かない。

代わりに、ガンロックの金色の鎧に宿っていた光が、一つ碎ける。

ガンロック

ライフ4 / 5

同時に歓声が、客席から沸き立つ。

ガンロックの巨体が揺らいだのだ。

日がな刺激を求める一般人には、ちょうど良いスパイスになるのだろつ。

ここでアリサは躊躇する。

残るソーダールで、アタックすべきか、せざるべきか。

半端な攻撃は相手にアドバンテージを与え、自分の首を絞めかねない。

…それに、奴の手札に“あれ”があれば―！

「―いや、臆するな。ここでライフを削れるというメリットもある―もう一体の《ソーダール》でアタック！もう一つ穿て！」

「やはり来たか」

《ソーダール》の拳動を見たガンロックの鉄板のような頬が、つり上がった。

それに連なり、アリサも舌を打つ。

「気付いたか！だがもう遅い――ライフで受ける！」

《ソードール》の二度のアタックはバリアを通せず、しかしガンロツクの命を削る。

「ぐうつ……。この痛み、俺の力に変えよう！《巨獣皇スミドロード》Lv1で召喚だ！」

《巨獣皇スミドロード》

1、Lv1、BP3000

客席の歓声に混じってギャラクシーの声が、微かに聞こえる。

客を盛り上げる商売に、抜かりはないらしい。

…ライフ減少時、3以下ならばノーコスト召喚ができる《巨獣皇スミドロード》…。迂闊だったか…。いや、予測の範疇だ。まだやれる。

「ターンエンド！」

アリサ

■《ソードール》×2

1、LV1、BP1000

ライフ5

手札3

リザーブ1

トラッシュ2

ガンロック

□《巨獣皇スミドロード》

1、LV1、BP3000

□《超時空重力炉》

0、LV1

ライフ3

手札3

リザーブ2

トラッシュ3

### 【ターン3】

コアステップ、ドローステップ、リフレッシュステップを終え、メインステップに踏み込んだガンロックが、迷いも躊躇いも感じさせぬ動きで、手札のカードを取り出した。

「メインステップ——ネクサス《超時空重力炉》をLV2に。そのコアを使い……。太古に眠りし巨獣のXレア、《凍獣マン・モール》を召喚！」

「——早い……っ！」

ガンロックのフィールド、《スミドロード》の隣に沸き上がる氷山に、アリサは焦りを感じる。

Xレアは、バトルスピリッツのカードのレア度を表す位で、最も高いレア度を誇るカードだ。

当然、通常のスピリットで太刀打ちできる半端者など、一人もいない。

たった今出現した、長い鼻の先に鉄球を持つ《凍獣マン・モール》は、強大な守りの力を持つXレアだ。

《凍獣マン・モール》

1、LV1、BP6000

牽制か。

アリサは推理する。

《凍獣マン・モール》が真の力を発揮するのは、LV2以上からだ。

LV1の状態では如何にXレアと言えど、対処のしようはある。

ガンロックもそれは折り込み済みであるはず。

…この《マン・モール》…。 呟か。

「《巨獣皇スミドロード》をLV2にアップ」

《巨獣皇スミドロード》

2、LV2、BP5000

更なる力を与えられた《巨獣皇》の咆哮。

しかしその咆哮、種の見えたアリサには小鳥のさえずりにさえ感じられる。

ガンロックは実直な男だ。

こう、と予測してハズレることはあまりない。

「ターンエンドだ」

ならば、彼の狙う陣形が整う前に、本丸に攻め入るのが堅実か。

ガンロック

□《凍獣マン・モール》

1、LV1、BP6000

□《巨獣皇スミドロード》

2、LV2、BP5000

□《超時空重力炉》

0、LV1

ライフ3

手札3

リザーブ0

トラッシュ 4

アリサ

■《ソードール》×2

1、LV1、BP1000

ライフ 5

手札 3

リザーブ 1

トラッシュ 2

#### 【ターン 4】

「ドローステップ！ー来てくれたか」

今度微笑んだのはアリサだ。

漆黒のドレスを纏った少女の冷徹な微笑みに、ガンロックがたじろぐ。

…奴の思惑。“手札にあると推測できる、もう一枚の《マン・モール》”をこれで牽制できるか。

カードを持ち変え、

「リフレッシュステップ。ーメインステップ！来たれ！死と再生を司る蛇！くちなわ《ジャイナガン》を召喚！」

呼応して、現れ渦巻く瘴気の最中に、紫の蛇が姿を表す。

ジャイナガン

《ジャイナガン》

1、LV1、BP2000

続けざまに、

「バーストセット！」

「バーストか…」

…何を仕掛けた…。《ソードル》に続き《ジャイナガン》。アイツのデッキは紫白の可能性があるから、―《絶甲氷盾》か、《マン・モール》の隙を突いた《氷河零刀斬》か、あるいは…。

アリサがコストを支払わずにフィールドに出したのは、バースト効果を持つ、バーストカード。

ライフ減少やスピリット破壊をトリガーに反応し、強力な効果を用でける特殊なカード。

先の《巨獣皇スミドロード》も擬似バーストカードと言えるよう。

「アタックステップ！《ジャイナガン》、貫け！」

《ジャイナガン》のしなやかな筋肉が躍動。

土砂との摩擦音だけを発て、《ジャイナガン》の身体を《マン・モール》の前に運ぶと、

「ライフで受けよう」

《ジャイナガン》の身体が突如跳ね、それに合わせて《ジャイナガン》が紫色の怪光線をガンロックに放つ。

ガンロックを保護するバリアが怪光線を遮るが、

ガンロック

ライフ 2 / 5

「当然、受けるか」

「《ジャイナガン》には破壊時効果がある。ソレで俺の《マン・モール》を失いたくないからな。そして今の一撃は、俺にそのバーストの正体を知らしめたぞ」

次に相手の手口を読んだのは、ガンロックだ。

ならば、対抗策を講じねばならないが、

「続けるぞ。――《ソードール》、穿て！」

「ライフだ」

飛び掛かる《ソードール》の一撃を受けたガンロックの鎧に宿る輝きが、ついに残り一つとなる。

ガンロック

ライフ1/5

「後一つ、――穿て！」

最後に、疲労していない《ソードール》の疾走。

《ソードール》の細い両足の関節が“くの字”に曲がり、跳躍の予兆を見せる。

しかし、

「――《マン・モール》でブロック！」

《ソードール》の身体が浮かび上がる。

しかし、ガンロックにより放たれた一言は、《ソードール》の浮上を止めた。

《マン・モール》が動いたのだ。

《凍獣マン・モール》

LV1、BP6000 ↓ 8000

《ソーダール》

LV1、BP1000

「《マン・モール》の効果により、BP+2000！合計8000のBPで向かえ打つぞ！」

《凍獣マン・モール》は、その長大な鼻の先に付いた鉄球を振るい、《ソーダール》の身体を右から薙ぎ払った。

《ソーダール》の骨の肢体は、何にも及ぶかも知れないその一撃に、遇えなく粉碎され、爆散する。

「バースト、来るか…！」

「だったらお望み通り、—私はバーストを発動！」

すると、バーストセットされていたカードが跳ね上がり、アリサの小さな手に収まる。

アリサはそれを提示し、

「紫のスピリット《ソードル》の破壊により、《呪の霸王カオティック・セイメイ》のバースト効果が発動！」

紫の燐光を放つソレは、やがて触手を伸ばし、《凍獣マン・モール》を取り囲む。

「《カオティック・セイメイ》の効果で《マン・モール》のコアを一つ、トラッシュへ」

束になっていた触手が引き剥がされると、《マン・モール》の姿はそこにはなかった。

コアとはスピリットやネクサスを生み出す、命の源だ。

当然、生命力であるコアが剥ぎ取られたスピリットは自然界の摂理に従い、死亡する。

紫の特色として、相手の生命力を奪い取ると言うものがある。

「《マン・モール》よ。すまない……」

「破壊された《ソードル》は紫だ。追加で一枚ドロー。―そして霧のように現れ、霞のように消え去る。《呪の霸王カオティック・セイメイ》は手札へ」

《マン・モール》は知らず知らずの内に、《カオティック・セイメイ》の計略に嵌まったのだろう。

歯噛みするガンロックを他所に、アリサはターンエンドの宣言をする。

喜べる状況ではない。

ガンロックの手には、もう一枚《凍獣マン・モール》が潜んでいる可能性があるのだ。

気は抜けない。

松風アリサ

■《ソードル》

1、LV1、BP1000

■《ジャイナガン》

1、LV1、BP2000

ライフ5

手札5

リザーブ2

トラッシュ2

ガンロック

□《巨獣皇スミドロード》

2、LV2、BP5000

□《超時空重力炉》0、LV1  
ライフ1

手札<sup>3</sup>

リザーブ<sup>2</sup>

トラッシュ<sup>5</sup>

## 【ターン5】

メインステップへ入ったガンロックの目が、《巨獣皇スミドロード》の隣を向く。

先ほどまであった威圧感は、そこにはなかった。

乾いた風が流れる。

一息。

「《超時空重力炉》を《巨獣皇スミドロード》のコア一つを使い、LV2にアップだ」

《巨獣皇》が脱力したように、肩を落とした。

《巨獣皇スミドロード》

1、LV1、BP3000

代わりに、コアを得た《超時空重力炉》の帯電がより一層激しくなる。

ガンロックは以前、アリサに手酷くやられていた。

ガンロックのデッキは、中速の足が遅いデッキだ。

すなわち、高速で回転するデッキやデッキ自体を破壊されることに弱い。

ガンロックを任したアリサのデッキは後者だ。

雪辱。

だが、今のアリサのデッキでは、以前と違い、ガンロックに優位性がある。

…紫が相手ならば、この勝負。―勝てる！

思ったガンロックの手が動いた。

「リザーブと《超時空重力炉》のコア全てを使い、第2の獣《凍獣マン・モール》をLV2で召喚する！」

《凍獣マン・モール》

5、LV2、BP9000

震撼する大気、現れる威圧感。

氷山を砕いて再び姿を現した《凍獣マン・モール》は、より堅牢な毛皮を振るい、なだらかに雪を落とし、そして―

『オオオオオオオオ!!!』

観客の歓声を背負い、高らかに吠えた。

「ターンエンドだ」

ガンロック

□ 《凍獣マン・モール》

5、LV2、BP9000

□ 《巨獣皇スミドロード》

1、LV1、BP3000

□ 《超時空重力炉》

0、LV1

ライフ1

手札3

リザーブ0

トラッシュ4

松風アリサ

■ 《ソードール》

1、LV1、BP1000

■ 《ジャイナガン》

1、LV1、BP2000

ライフ5

手札5

リザーブ2

トラッシュ2

白き城塞。〈凍獣マン・モール〉の壁。（後書き）

〈反省会〉

アリサ「…少し長過ぎないか？文面も汚ければ、更新も遅い。書く気はあるのか？と問おう」

書いてるじゃん！悪い！？色々忙しかったり、《ニヤルラ・トラップ》でポイポイしたり、忙しかったりしたんだよ！わかる！？

アリサ「後半遊んでないか？—まあいい。何故今回は一話で完結していないのか、聞かせてもらおうか」

…尺の都合とかあるじゃん？そこんとこ考慮したりしてたら、こうなったわけさ！

アリサ「要約、めんどくさかったから」

要約すんなよ！—それよか《マルティウサギ》可愛いよね！ケモナーの俺としては、Uの《ハギト》よりCの《マルティウサギ》のがうなだけでさ、そこんとこどーよ？

アリサ「それで先日、友人に引かれていただろう？カミングアウトすべきではない。いいか？人の性癖というのは往々にして—」

カードを持てば、誰でも霸王！…霸王か…。

アリサ「おい私の台詞……！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6561y/>

---

そうだ。バトスピで食べよう。

2011年11月26日16時48分発行